

〈翻刻〉九州大学音無文庫蔵『知頭集』(一)

藤島, 綾
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/10387>

出版情報 : 文獻探究. 28, pp.12-31, 1991-09-30. 文獻探究の会
バージョン :
権利関係 :

〔羽刻〕

九州大学
音無文庫蔵

『知頭集』(一)

藤島 綾

〔凡例〕

- 一、本資料は、九州大学附属図書館音無文庫蔵『知頭集 上下』
(一冊 宝暦十二年写)を翻刻したものである。
- 一、原本は、縦二七・七センチ、横一八・八センチ。墨付九十丁。
奥に「元文五庚申如月廿日写之 水竹居作口」さらに、「宝
暦十二巳五月廿二日写之畢 紙員九十葉(印)」とある。
- 一、漢字は、原則として、常用のものに改めた。
- 一、衍字はへゝに、傍書は()に入れ、それぞれ当該語句の下に
示した。
- 一、本文における明らかな誤り、不審箇所については、原文を残
し、傍線を施した。またこれらのうち、a「書陵部本和歌知
頭集」b「島原文庫本和歌知頭集」(片桐洋一氏『伊勢物語
の研究 資料編』所収)により、本来の形を推定できるもの
にかぎり、両者の本文を()に入れて示した。
- 一、適宜に改行し、句読点、濁点を施した。
- 一、定家本に基づき、伊勢物語の章段番号を付した。
- 一、改丁は「で示した。

伊勢物語知頭集巻第一

序首

夫和歌は、人の心をたねとして、能人の心をやはらぐるゆへに、隠
(本ノマ、)遁の源として菩提を求るはじめなり。先極楽に歌舞の
菩薩まします。天竺に陀羅尼のことばあり。漢土に詩賦を作る。夫、
むくさにわかれたり。なかにも我國の風俗として、神代上代のむか
しより末世の今にいたるまでたえず。其はじめを尋へ尋へれば、久
かたのあめにしては、したてる人(a 姫)にはじまり、あらかねの
つちにしては、そさのをのみことよりぞおこりける。しかれども天
にしては、ことばもこわく心かすかなりき。地にしては、文字もさ
だまらず句をかき(a b ら) (a ざれば、これかれかよはして
知がたし。其後神武天皇の御時より、よろづ神々を所々にいわひ奉
りしに、此みこ女とすみ給んとて宮造し給。彼所に八色の雲の立け
るを見て、めでつゝよみ給へる、

八雲立出雲八重垣妻こめに八雲(a b へ)垣つくるその八重垣
を

といへるより、文字を三十一字にさだめ、句を五句にわかちける。
されば、哥のすがた、うたのしな、哥の心、哥のことば、皆是まよ
ひのまへには寄(a 綺)語、妄語の罪となり、さとりまへには法
喜、禅悦のあぢわひとなる物也。先大和哥と名付し事も心も(本ノ

マ、)はもにかよひて、をほきにやはらら(本ノマ、)げしゆへなり。次に、文字を三十一字にさだめし事は、如来の三十二相になぞらふるべし。「^一其如来の三十二相の中に、无見頂相と云相まします。凡知あらわする事なし。故にあらわれて三十一相也。又、此哥に必ひとつのころ有。これは文字にあらはれずして底よりしらるゝなり。されば是を如来の无見頂相にたとへて、三十二相と云。かれを三十二相を「a bと」思ふべし。

次にうたに五句有。いはゆる遍、序、題、興、流と云。是則、地、水、火、風、空の五輪なり。しかれば此哥をよくつくりいだす時は、五根五力の仏をつくり、五智、五相、五写「a時 bじ」の法皆これよりおこれり。もし人あしき哥をよみいだしぬれば、衆生の体へのぞむによりて、五雲、五歌、五意と成。

次に哥に三身有。一には、題を心に思て、詞に不言。たとへば菊をよめるに、

うつ「bへ」しうへば秋なき時やさかざらんはなこそちらめねさへかれめや

二には、題を詞「^二まに」あらはして、心にさらにふかくおもはず。たとへば桜をよめるに、

桜花開にけらしもあし引の山のかひよりみゆるしら雲

三に、題を心にもふかく思ひ、詞にもたしかにあらはしてよめるなり。たとへば、なを桜をよめる、

桜色に衣はふかく染てきん花のちりなん後のかたみに

是らの哥、即、法、報、応の三身の如来なり。題を心にも思はず、言にもたしかにあらはさざる哥のすがたよろしからぬをば、三身闡(本ノマ、)いたる哥とするなり。又、心に思ひて、詞にいわざるをば、空を「a bと」す。是は法身の如来なり。又、心に思はざれども、ことばにあらわしたるは、是、仮とす。報身如来なり。又、

心にもふかく思ひ、たしかにあらはしたるは中とす。是、応身如来也。ひろく衆生の哥を化度して、帰りて又法身如来の体に「^三あたる空となるべし。此哥、空、仮、中の三体にせり。されば、題を心にもふかく思ひ、詞にたしかにあらはして哥をよむべし。次に六義あり。

いわゆる一には風と云は、そへ哥なり。

難波津に咲や此花冬籠今は春べと咲やこのはな

二には賦と云は、かぞへ哥なり。

咲はなに思ひつく身のあぢきなき身にいたつきの入もしらずて

三には比と云は、なぞらへ哥也。

君がけさ朝の霜とをきていなば恋しきごとに聞やわたらん

四には興と云は、たとへなり。

我恋はよむともつきじありそ海のはまのまさごはよみつくと

も

五には雅と云は、たゞごと哥也。

いつわりのなき世なりせばいかばかり人のことの葉嬉しからま

し

六には頌と云は、いわひうた也。

此どのはむべもとみけりさ「^四き草の三葉四葉にとのつくり

せり

此哥の六の義、即六波羅密の行也。されば、よき哥一首よみ出せば、三十二相具足せる五根五力の仏をつくり、六波羅密行を修するなり。又、あしき哥をよみ出す時は、衆生の神の損するがゆへに、六欲と成て、いまだ輪廻をはなれぬなり。されば、此哥を真実法と思ひ往生のたねと思べし。

次に哥に六体あり。即、短哥、長哥、旋頭、混本哥、廻文哥、誹諧哥なり。

先、短哥と云は、哥の句をふたつにさだめて、五七とも十二字を一首とさだむる也。故に短哥と云。是には上下の句もさだめず。いはんや五体五根とあつる事なし。此哥のすがたはいくつの句を限るともなし。たゞいくらにてもあれ、いゝつゞくるなり。

次に、長哥と云は、哥の文字を三十一字にさだめ、句を「五五句にわかつ也。五句と云は、さきにいゝつるがごとく、地、水、火、風、空の五輪也。其すがたは、

梅の花それとも見へず久かたのあまぎる雪のなべてふれゝば

と云り。第一の五文字をば頭句と云。是は空也。第二の七文字をば首の句と云。是は風也。第三の五字をば胸の句といふ。是は火也。

第四の七字をば腰の句と云。是は水也。第五の七字をば尾の句と云。是地也。是はおはりの句成べし。衆生の体にのぞむる時は、足の句などにあたる也。此長哥を三十二相になぞらへつる、眞実の哥の本とは思へし。五句一の心ともかけざれば、即五根五力の仏をつくる。百の哥を誦ば、百の仏をつくる。千の哥をよめば、千の仏をつくる也。上句若難あれば頭の病と云、中句(本ノマ、)に病あれば首の病と云、「下」下句にたゞりあれば腰の病、尾の病と云。上下の句にわたりて不具なれば、腰をれ哥と云なり。故に心得ずしてあしき哥をよみつれば六根まつたからず、五体さだかならず、くるしみある衆生をつくるゆへに、いまだ輪廻をはなれぬ哥とかなしみて、能々さばかりなをすべき也。

次に、旋頭哥と云は、上句の外に五字にても七字にても句を一句よみぐせる也。たとへば、

此をかにかるおきな(イニおのこ)しかなかりそありつゝも君かきまさんみまくさにせん

とよめり。ありつゝもと云句をよみぐしたり。次に、混本哥と云は、五句の内に五字にても七字にても一句よみた

らざる也。たとへば、

ゆふかげまたでちりやすきたゞあさがほのはなのなぞかし
是はじめの句を一句よまざる也。

次に、廻文哥と云は、三十「三」三「十」十「一」一の哥をさかさまによむも、同心同調よまる、成。たとへば、

むら草にくさのなはもしそなはらばなぞしも花のさくにさくら
と云り。

次に、俳諧哥と云は、三十一字の哥の詞を狂じたはれたる心に誦る也。たとへば

人にあはんつきのなきよは思ひをきてむねはしり火に心やけお
り

と云り。これらの六体は、さどりのまへには六道の法身の仏とあらはれ、迷のまへには地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天のちまたとなる。是をあつる時にさかさまにあつる成べし。短哥をば天道にあて、長哥をば人道にあて、旋頭哥をば修羅道にあて、混本哥をば畜生道にあて、廻文哥をば餓鬼道にあて、俳諧哥をば地獄にあつるなり。凡此哥の中に長哥、俳諧「ま」まはことほりたゞして文字もさだまり、五根五力の五句とゞのほりて羅「a」a「b」b「つ」つも功德も此二哥より出来ゆへになり。されば六道輪廻の中に、衆生の仏に成道、地獄道、人道より外は、仏に成道有がたきゆへに、此二哥を二道にたとへたる也。残り四道のあしき哥をよみてつみにもならず、よき哥をよみて功德にもならず。されども凡世間のことほりわのごとし。夫天地なくしても衆生ありがたく、草木なくしても衆生ありがたく、男女なくしても衆生ありがたく侍り。故に是皆世間をかざるがごとし。罪にもあらず、功德にもあらねども、此四体を具して哥の六体とする成。

次に哥四病あり。

一には、同字の病、是は詞こと成と云むとも不の字の同くて二あるなり。たとへば、哥云、「⁽³⁾なり。

みずもあらずみもせぬ人の恋しき「⁽⁴⁾はあやなくけふやながめくらさん

と云り。此哥によめるみずも不文字也。又、みもせぬのぬも不文字也。同不文字の二あるがゆへに同字の病とてきらへる也。

次に、同韻字の病と云は、句のをはりの字のをなしくさしあひてあるを云也。たとへば、

いざやこらかしまのかたに打むれて袖さへぬれてあさなつみてん

と云り。此哥に、むれてのと、ぬれてのと、同じをはりののての字成が故に韻ときらへる也。是を同韻の病と云なり。

次に、詞病と云は、文字はことなりと云へども、同内のことばのにも三もさしあひたるを云也。たとへば、

み山には松の雪だにきえなくにみやこは野辺に若なつみけりと云り。み山のみやと、みやこのみやと、文字ことなりとい「⁽⁵⁾へども、いま仮名に書たる面を打聞には、同詞に聞へてさしあひたるが故、同詞の病ときらへる也。

次に、同心の病と云は、たとへば、

山桜わがみにくれば春霞みねにも立かくしつと云り。山といふも、みねと云も、たゞひとつなるべし。されば、

かくよめるを同心の病ときらへる也。哥の病をほしといへども、此四病を殊にいましめたり。是は、衆生の体にのぞむに、生、老、病、死と云四苦のたとへなり。故に此四病を哥にはよまじとする也。但

さとりによく心得て、のがれ所なしとてよみさだめたる哥には、此哥ありといへども、さらにくるしからず。たとへば、さとりのまへに

罪のなきがごとし。凡、釈尊ひたすら此四病をはなれ給はず侍き故、能々心得てさとりにてよむべきなり。若又「⁽⁶⁾あしく心得てよみたらん哥に此病あらんにをひては、甚あしかるべし。たとへば、迷のまへにつみをもきがごとし。これを哥の四病と云也。

次に四病「⁽⁷⁾妄まう」あり。さきの四病にかさねて哥の八病と云。是、衆生の体にのぞむる時は、愛、別、離、苦の四病を、さきの四病にかさねて人間の八苦と云、これにたとへし。

凡哥をよむには如斯心得て、古病「⁽⁸⁾哥うた」の詞の中にやさしく面白き詞をえらびて、めづらしき風情をたづね求べし。それ、まうちぎみの詞にいわく、ふるくてもふるかるべき哥の詞、いはゞ人の心得のごとし。あたらし（本ノマ、）もあたらしかるべきは哥の風情、たとへば人の衣のごとし。和哥は是、其源、地よりも生せず。其花、天よりもひらけず。たゞ人のこゝろをたねとして、自然のこと「⁽⁹⁾はりとなれり。たとへば面のごとし。生々世々を経とも風情つくる事あるべからず。夫王仁が詞千（本ノマ、）あり。たわぶれよりこのかた、人の心うつりかはりやすくして、和哥をつくるもの、かずいくばくとさだめがたし。かゝれば今の世の人、詞にまよひ、風情にたどりて不知。谷かげ草がくれのみあるべきを、さかしくをされる心をなして、くらき夜のやみに灯をそむけあへる事、甚心うきかなや。されば、知人は家をおもくして不知と云、しらざる人は道をあざけりてよくしれると云。故にさひつ比、すみよしにまうでたりしに古人のかたし「⁽¹⁰⁾かたりし」詞、をくふかきをもをしまつ、あさきをもあざけらず、ことごとく記あつめ侍なるべし。是、更にしれる人のためにあらず、しらざる人のため成。又、「⁽¹¹⁾しれる人には不恥、しらざる人には恥べし。もし、此歌道にいらんとおもひて、とをくもとめ染て尋る人あらば、三の器量をかゞみて三人まではゆるすべし。三人と云は、一、道を

おもくせん事、千頼、万頼の玉ひとしく、心ざしふかくして、此事一入再入の紅よりもことならば、悦びこれをつたふべし。そさのを玉つしまの古風を仰ぎ、三十一字の詠を世につたへむとなり。二には、器量よく、其うつはものとして一事に万事を照す人あらば、是をゆるしかたるべし。人丸の下流を汲て、和哥六儀をすたらかさじとなり。三には、家をまぼり、詞をほめて千金のほひ、半偈に身をすつる者あらば、是をゆるし待べし。夫、諸仏の御心にかなひ、たちまちにをんをほうずと也。故に或文を見るに、恩をしらざるは畜生(ちくせい)にことならず。常に六趣に輪廻して永成仏せずといへり。凡、此三の器量にあらざらんをひては、たとへつきくさのひとさかり色こくとも、露にうつろう色ありとも、ゆめくこれをゆるしつたふべからず。此法をわたくしするにもたれば、さしもをしむべきにはあらねども、すく(すく)「(bこころ)」に私する事ならで、わらはべの草かり笛となり、夏の扇の手すさみとなりなば、和哥の道もをにかくるべき所もあるまじければなり。秘すべしく。おしむべしく。

抑すみよしの古人に問あつめたりし事をもらさずしるしをくゆへに、和哥知願集となづけ侍るなり。夫、すみよし、玉津嶋の明神の照覽もおそろしく、ふるき人の心もはづかしけれども、悉しるしつけ侍り。たゞし、力を尽し、「(ま)ほねをおりたるかひもなく、古の古人のごとくふかき事をおしみてあさき初ばかりを云とやおもふ人侍らんといたましければ、ゆめく其義なきよしを一筆の誓状をしるし申べし。このうへはそのうたがひあるべからず。夫、伊勢并古今和哥集の内に、心のをよふ心「(bほ)」どの事、不審をひとつももらさず聞し程のも「(b事)」を、或はふかければとおしみ、或はあさければとてあざけりて、此知願集に書もらす物ならば、そさのを、たまつしまの明神、人丸、赤人の御にくまれをかうぶりて、ながく

哥道にまよはんこと、深夜に灯をけせるがごとくなるべし。

和歌知願集相伝人々事

大納言源経信朝臣(ま)

木工頭源俊頼朝臣

俊恵法師

寂蓮法師

從二位藤原家隆朝臣

遠所女房

隆専法師

隆憲法師

立申起請文事

右件之者 山「(b此)」和歌知願集をつたへて後、序の詞のごとくに、三器量をあらびて、一人、二人、もして三人より外これをつたふる物ならば、すみよし、たまつしまの明神、人丸、赤人、殊にはそさのを、春日大明神の御心「(bに)」くまれを「(ま)」あつくかふむりて、ながくもとむる所の哥道にまよひ、ついに三悪道におつべき者也。依意趣如件。

隆憲法師 在判

伊勢物語知願集巻第一

抑去九月十三日、心ざす事ありてすみよしにまいりて侍しに、時しもあれ、今夜かの社の御まつりとして、ゆゝしく人しげくあつまりのゝしりつゝ、はまのまさごをあらそふなれば、宮中は閑なるかくれがもなくて、はまのかたにあくがれ出てみれば、波の上のどかに、うら「(bくも)」のちりなき月のひかり、千里の外まで心もあくがる

れば、夜いたうふけて後、つり殿のうちをみれば、あやしき翁あり。さしよりてみるに、としはいまは百歳ばかりにも「いそ」みちぬらんとをぼゆる翁のひげ、びんしろきが、月の光にあらそふ色なり。月をもめでじ是ぞ此、と口ずさみつゝあるを、かたはらにみなみて能々みれば、しろきすいかんのふるびたるに、くずのはかまのこゝかしこやぶれかゝりたるをきて、立系ほしをみゝぎわにひき入たり。年のほども哀に、心のうちもゆかしくて、なを近々さしよりて、是はいづくよりまいり給へるぞと問程に、ゆへありて物なんどいひ侍れば、心にくくをぼへて、なにくれの事どもいふほどに、翁ふるき世の物語しはてて、今はやまと哥のことにとりかゝる間、いよく心まさりて問程に、抑此世中にをほく人々のもてあそぶ伊勢物語といふ物はいかばかりか学し給へるぞ、ゆゝ「わか」しく、心ふかく「いそ」作たる物にこそ侍めれと云に、いさとよ、いか斗なる物やらん、竹馬にむち打し時より、古人にあひて三度聞たりしかども、其人ほどなく身まかりしかば、思ふ程も不承、その後、独めのつれづれなる余に打かへし見つゝくるに、いとおぼつかなきことのみをほく侍りき。さやうに年たけ給たる人なんどこそ、をほく聞集給たるらめ、さもあらば、月の夜の思出にかたりたまひんやと云に、翁打はらみて、いさとよ、我も系しらず、たゞし、しりたりとも、さばかり御哥物語の奥儀を対面の初には。いつしかきはなく申さん事もいよくしからず。かつは、法をあざけり、道をかるしむるかたもあるべしといへば、あなゆかしく此人はよく、奥儀をきわめたるにこそと、いよく心にくくお「いそ」ばへつゝ、是は、我とし比この事に心をつくし侍しゆへに、大明神の御あはれみにてしめし給へるにやとまでに覚へければ、うれしき事云ばかりなし。たゞし、又、おしかへしせめとはゞ、よもいわじとは思へども、さてしもやむべきならねば、しみて云様、百たび千たびあひ奉るとも、志のな

からんには、かく玉の光なく、琥珀のちりをとらぬにてこそあらんずれ。夫、法は人をきらわず、心機に応ず。光明こそ系を系らばず、とせめて今念仏の詞をてらす。されば、宿縁のもよをすには、夏の木かげ、市の中にも諸をうるためしし（お歎）ほく侍。然に、われもとむる志ふかし。今又、時にあへり。はやく是をかたり給へと云ば、翁は云やう、誠に御志のいたり申「いそ」をよばづ（ず歎）。たゞ翁もそのみ（わか）そのかみ）むねの内に聞あつめしかども、又人にかたる事なかりしかば、何とやらん、ひとそら（わか）ひたすら）にみちたる心ちすれば、ふかく求、とをくしたふ人の心は、花になり紅葉になりて、誠に求者なければ、むなしくて過しぬるに、あながちに今尋給へば、此翁がためにも得分ある心ちしてをほゆれば、いさゝかあな（本ノマ、）ほらずとも、物いひてむねすこしひまもふけんといへば、うれしさのあまりに、いまだ翁の物もいひはてぬさきに、此物語のおこりをとひかゝり侍しなり。

問 抑此物語は何事を所詮として、いかなる人のつくれる物ぞや。まづ此をこりをほつかなし。是を承らん。

答 此物語は、人王五十一代の帝、平城天皇の御子、阿保親王「いそ」の第五の在原中将業平朝臣みづから色をこのみてふるまひたりしことをむねとして書置たりし物語なり。

問 さて、かのなりひらはいづれの御代にあひて、いくつ斗のとしまでありける人ぞや。それにつきて尋うけたまはるべき事あり。

答 此人は、平城天皇の御弟、淳和天皇の御時、天長二年八月に誕生して、其後仁明天皇御時、承和八年正月七日うみかうぶりして右近大輔将監、十七歳にて、仁明、文徳、清和天皇につかふまつりて、陽成天皇の御宇、元慶四年五月廿八日、五十六歳にて卒する也。

問 さればかねてもをろくかく承しゆへに、不審ふかくして今尋申也。其故は、此物語はまさしく業平みづから「いそ」作りたること

だめ給へるに、此業平は陽成天皇御宇、元慶四年に卒したりと仰らるゝに、又、此物がたりにせり川の行幸の事書入たり。かの行幸と申は、仁和二年十二月十四日寅の一点の行幸なり。初雪の興によりて、御鷹狩のために小松の天皇の行幸と見へたり。小松の天皇と申は、陽成天皇の次、光孝天皇の御事也。されば此行幸は、業平死て後七年の事也。然に、此筆誠に業平の書たる物語ならば、よくく不審也。いかでか我死なんずる後の事をかねてしりて書置べきにや。答 さればこそ伊勢物語の大事とはかやうの事を申也。是をたやすく申べきにあらず。

問 もとより伊勢物語の大事を承らんと申つるは、かやうの不審をひらかんがためなり。「¹³³世間にあまねく申あひたる儀共は、おほく聞て侍也。されども信用せられず。はやく実儀を承らん。

答 誠に尋給所、池のつゝみの水もるまじげに侍れば、いかにもおしみゑつともをぼえず。さらばよくく心をしづめて聞給ふべし。

申侍らん。先、業平はをほく妻(ツマ)をもちたりし中に、元慶元年十月の比よりして、大和守藤原継隆と云者のむすめ、伊勢といひし女を妻とさだめて侍き。其年、男五十歳、女廿五歳也。其間に、この物がたり清書して世にとりいださんとするに、をほく、ときなきさき立(「bたち」)の御子(「bこと」)より初て、人のため、我身のため、いたましかりぬべき事のみありければ、これにはさかりて左右なく取もいささず。去程に、同四年二月に、業平、妻(「133」)女伊勢にかたりけるは、我かゝる物がたりをつくりたるを、人のためたる身のためしなき事なれば、たちまちにひろうせず。老少不定の世のならひにて身まかり侍ることあらば、後の人の作り書たりけるやうにて是を世に出出しひろうすべしといふ置て、同五月に身まかりぬ。其時伊勢なくく跡のわざしてありふる程に、亭子御門、これを御らんじて思食けるが、御めぐみふかくて更衣に成ぬ。此伊勢は

もとより七条の后につかうまつりければ、こなたかなたにつけてひまなくして業平が遺言を忘にけるが、思出て、此物語を取出て世にひろうしてけり。其後、寛平四年五月は、業平がわざのはて也ければ、里に出てとぶらはんとて出にけり。さて、業平が「¹³⁴そのかみ書置たる物どもを又みるに、ある物の底(ソコ)に、伊勢物がたりと書たる物あり。これ、今のうみかぶりの本也。其時おもひけるは、われそのさきにとり出して世間にひろめたりしは、あらざる外の物也けりとて、又、是を清書して世にひろうせんとするに、伊勢がことのみをおほく書入たりければ、我身たうじは御門の更衣成、さればあしかりなと思ひて、我身の事を書たる所をばぬきかへて、それにすこしきにたる物がたりを書かへくしたる也。されば、ぬきかへたりし伊勢が筆の内にて、せり川の行幸はあるなり。これのみならず、時代さがりたる物がたりは、みないせが後に書かへたる筆の内なるべし。

問 さて、かの伊勢が書かへたる筆はいくつばかり有ぞや。

答 伊勢「¹³⁵が事書入たる所は十六段ありけるを、みなぬきかへてかけり。其外に二段あり。惣じていせが筆は十八段書たるなり。

問 業平は、ゆゝしく色ふかく心余(本ノマ、)人也けり。さしも女のため、身のため、かたはらいたき事をしも書、をかしき物を。

みなやうこそありけめ、それをぬきかへて思ひの外の事を書入けるはいかんとやおぼへ侍る。

答 なりひらは、われよく成たらば、又此物がたりを取替よと云置たりしを、女思出て取出さんとするに、我身更衣として、御門に御めぐみふかゝりければ、いかゞをぼしめすらんと思て、取もいでざりけるに、又思けるやう、さばかり業平の云し事をむなしくあらんもつたてかりぬべければ、わが事を書入たる所ばかりぬきかへてあらんわ、何かくるしかるべきとこそおぼ「¹³⁶へ侍る事なれ。

問 たゞし、余の物がたりを見るに、又いせが事をあらはしてはよも書侍らじ。たれとなく女ありとこそ書たりける。いかに是をば書かへけるぞや。

答 誠に物語のおもてにはいせとはかゝねども、伊勢が所には又うたのありける也。されば其哥にて皆あらはれぬべかりし也。其故は、いせが哥はあまねく世間に入るふして知ぬ人なし。されば、いせと云名こそあらはれねども、哥にてみな人しりぬべし也。

問 さて十六段はさも有ぬべし。今二段を伊勢が私にことさら書くはへたらんはいかゞとをぼゆ。これ、何事のゆへさある。又、いかなる物がたりぞや、をぼつかなし。

答 是は、業平病にわづらひて、心ちたのもしげなくをぼへければ、とし比もちたりける武内房内集と云物を火にやきすて」(一〇二)むと思ひてよめる哥に、

おもふ事いはで只にややみぬべき我とひとしき人しなければ
と云哥と、又、すでに身「ゆふ」さり死としける今日の入合ばか
りによめる哥に、

つゝに行道とはかゝて聞しかど昨日今日とはおもはざりしを
と云哥、これら二首は、病の床にふしかく「て」の事なれば、業
平が物がたりにも家集にも書入ざりしを、後にいせが筆にて、物が
たりにも家集にも書入たる也。

問 さて、かの十六段と云は、いつの物がたりぞ。悉あらはしなむ。
うけたまはらん。

答 それは、只今いはずとも、皆をしたてゝ一べんきかせ奉らんず
れば、其段にいたらん所は皆申べし。

問 抑、一切の物語、さうし、多「りやう」本と申は、はた物は
一つにて、哥など少ゝかわり、又詞ところ「か」は「さる事
そあれ、是は、先、はた物よりして、狩使本とて業平いせ人「へ」

くだりけるを初に書て、哥三百余首あるも侍り。又、うみかぶりの
本とて、奈良の京へくだりけるを初に書て、哥のかず三百余首書た
るも侍り。されば別々の物語のやうにをぼへたり。是はいかなるゆ
へぞや。能く不審也。

答 其事也。たとへば、いせが、先、寛平三年に此物語をとり出さ
んとて志けるに、狩の本をみ出してければ、さきに申つるがごとく、
いせ、我事を入たる所をば、皆こと物語のさにたるに書かへて世に
とり出してければ、時の御門、是をさらにいせがつくりたる物ぞと
をぼしめして、御感ありて、殿上にてさばくり、御本うつしと
へてけり。さて、世中のもてなしぐさに成ければ、余人もみなをの
く書うつしてとり」(一〇三)けるほどに、同四年五月に、なりひらの
はてのわざのとしにあたりて、其とぶらいをしける時、或物の底よ
り此うみかぶりの本みいだして、是ぞ誠の清書成けりと思ひて、則
さきのごとく、わが事を書入たる所をば書かへて世にひろうしける
時、さきとり出したる本をば中書なりとて、初うつしとりたる人々
に皆ならひこひ取てやきすてけれども、おのづからおしみて出さ
りける人の本に残りとゞまりて、かりの本とはいはるゝ也。されば、
是は中書のもとと写し伝る所なり。

問 よろづの物語をいせ物語と名付事は何のゆへぞや。これをよく
く承らん。

答 此物語の名をひて、おほくの儀を人々あらそひ申也。されば
是を聞人、皆まよいぬべし。故に、其儀共を悉申て聞せ」(一〇四)奉
べし。たとへば、此物語は、業平、伊勢の国へ下りし時、斎宮いさみや枯子
内親王をおとし奉りし事の上古にもありがたきふしぎなれば、世の
末の詞の花にさかさんとて、此物語を陰と書たる故に、いせ物語と
は名付たる也。此儀はいかにももちひ給へるや、いなや。

問 大かたは此儀は信ぜられず。其故は、よろづの物語に名をつく

る事は、おもてに所詮と見ゆる事のをこりを名付たる物也。然に、是は更に斎宮の御事を所詮とみへず。たゞあまたの物語を書あつめたる中に、是を書入たると覺へて、中の程に二三段書入たると見へたり。殊更、此物語をば二条の後の御事をこそむねと書たると覺えて、段のかずも二十四段書たり。又、心ざしもせちにして、身のほろびんずるもかへりみずと書たるめれ。「うゑ」されば、此後ゆへに、都の外へながされなんとしたりともゆへり。是なんどこそ、いはゞ所詮とみへたれども、名にはつけ侍らず。然に、わづかに二三段ばかり書入たる斎宮の御事を名につくべしともをばへず。さらば、又、はじめにも書、もしは、奥にも書とゞめよかし。あまつさへ、斎宮の御事を初に書たるかりの本をば、中書とて世にもちいす。是をいかでか名にはつくべきや。返々もちいられず。これはいかに侍るぞや。

答 能難じ給たり。されば是は正儀にあらず。又、一儀を申べし。此物語は、業平、清和天皇御時に、勅使にていせのかりの使にてくだりし時、かの天照太神の御まへにて発施まいらせつゝ、今勅使の身なれば、玉のすがたをおしかりて小車の鏝を御衣ゆたげにたちかけたるをおがみ牽りけるに、「あま」天の岩戸あけ給ひし神代のむかしも今のやうに覺て、みのけもいよだちて、今我身勅使にてまいらざらましかばかくあるべしやと、自歎しをばへければ、我身のふるまひを書とゞめて末の世につたへんとて、かの国にして思初て書たる物語なれば、伊勢物語と名づくる也。是はいかに、もちゐ給ふや、いなや。

問 これ、又、信ぜられず。さきに斎宮の御事二三段かきたるをだにも難じ申するに、是は又一段も其随喜感応の心とをほしき事なし。今かやうにの給ふ時こそ、さりける事かともをほゆれ、さらでは、つやく物語の面にみへず。又、其上、さばかり偲仰の信心ふかく

思ひ奉らば、いかでか彼御神の斎宮をばおかし奉べきや。心とふるまひと相応せず。されば、ゆめく不被用侍り。

答 誠にゆゝしく「あま」難じ給ふぞ。されば是も正儀にあらず。猶一儀申すべし。たとへば、なりひら身まかりて後に、妻女いせが此物語をとり出して世にひろめたりしかば、時の御門をはじめ奉り、いせが作りたる物語ぞと知会て作者の名によりて、いせ物語と名付此物語をとり出して世にひろめたりしかば、時の御門をはじめ奉り、いせが作りたる物語ぞと知会て作者の名によりて、いせ物語と名付られる也。是はいかに、用ひ給候や、いなや。

問 これも用ひられず。物語に名を付る事は、其中に書あらはず事心につきてこそ、名付侍れ。さればこそ橘妃の事を書たる物語をば、則はし妃と名付、唐国の事をのみ書たる物がたりをば唐物語と名付、大和嶋根の事をのみ書たる物がたりをば大和物語と名付たり。いづらは作者の名付たる事はあるなり。大和物語こそいせが作りたれば、いせ物がたりとも名付侍べけれども、其儀な「あま」し。又、源氏物語は、光源氏の事をのみ書たれば、源氏とて名付ける。作者の名をもち、むらさきしきぶ物語とは名付ず。しかるに、此物語ばかりにかぎりて、作者のなを付て云べしともをばへず。たとひ又、作者の名を付んに取ても、それにの給ふがごとくは後の人の付たるなどをばゆ。さて、業平の書ける時は何と申けるぞ。名もなくてはよも侍らじ物を。返々此儀信ぜられず侍り。

答 此難まことにいはれたり。されば是も正儀にあらず。真実にいせ物語と名付たり。たとへば、此物語は普通の物語にはならずかはりたり。其故は、我身の事をば古き世の事にいひなし、昔の事をば我身の事に書なし、京の事をばる中の事に云なし、田舎の事をば京の事に「あま」書なし、初に有べき事をおはりにいひ、をわりに有べき事をば初に書なしなどして、前後不同にたゞしからず書たるによ

りて、いせや日向といふ儀につきて、いせとはなづけたり。

問 此物語の体をみるに、大方次第さだかならず。今仰らるゝにつきて、少さもやとおぼへ侍る。但伊勢や日向と云事、因縁ありて云ならはしたる事やらん。是こそ知がたくをばへ侍れ。

答 伊勢や日向と云事、さる因縁ありて云。其故はむかし推右(a古りこ)天皇の御時、日向国に佐伯恒元と云者ありけり。病出して定業成ければ、四十一歳にして死也。又同代にあひて、いせの国いすゞ川の辺に栖ける文屋吉員と云者ありき。或時道を行けるに、さばへなすあらぶる神の時の怨にあひて、そも四十一歳同月同日(b)、ま時に死ぬ。さてかの二人、前世の宿留や有けん、同道して焰魔王宮に至りぬ。其時、帝釈のたまはく、此人、一人は定業の者にてのがれがたし。今一人は、あらざるほか、あらぶる神の怨にあひて来れり、是をばはやく娑婆に返すべしと有ければ、俱生神、札をさづけていはく、此召人、一人は非業なりといへ共、今は定業の者也。其故は、しやばに残り留る所のむくろを火にやきうしなひつるゆへに、たましゐ入返すべき物なしと申ければ、ゑんまわうのたまはく、此召人かれこれ二人同歳同性也。はやく非業の者のたましゐを定業の者のむくろの娑婆にあるに返入しとありければ、俱生神其時、文屋吉員をかたはらへゐて行ぬ。さて後、恒元が娑婆に残りとままりたるからだ、吉員(c)のたましゐを入返にけり。さてかの二人が妻子、いづれも歎かなしみける程、恒元が妻子かのはかのもとに行てかなしみけるに、四日と云に、此基(d)「はか」のいたゞきの土四方へくづれてのきにけり。其時いそぎほり出してみれば、死人、目を見ひらきにけり。妻子これをおどろきよろこびて棺中より取出してありけるに、此よみがへり人、妻子をみれどもよろこぶけしきなし。引かづきてふしぬ。妻子、いかにくといへども、返事せず。さるほどに、国人あつまりて、よみがへり人に、ことのありさまを

しきりにせめとひければ、我は是、いせの国いすゞ川のほとりに住し文屋吉員と云者也。あらぶる神のあたにあひて、はからざるに身まかり侍しを、ゑんま宮よりかへされて、此国の死人、恒元がむくろに入(e)て侍ると云。其時日向の国の住人等はからひて、いせの国へ使者を立て吉員が栖を尋させ、妻子告たりければ、妻子是を聞て、まことしからずは思へども、いしかへりたるといふうれしさに、いそぎ立出、かの使とつれて日向の国にいたりみるに、そのかたち我男にあらず。さればなつかしきことなし。女子三人ありける、これもむつまじとも思はざりけるに、此よみがへり人は妻子を打見て、うれしげに思、やがてしたしみよりてかたらひける。されども、なを妻子はむつまじともおもはず。其時よみがへり人妻に云けるやう、いかに我をばうとくしく思あつるぞや。汝に我ちぎりをむすびし事、しかへも也き。子三人あり。太郎はいくつ、二郎はいくつ、三良はいくつ、又、(f)其名をば何がしくと云。又、我此娑婆にそむきし月日、いつの月日なんと云つ、是のみならず、最後の有様までこまへくとありのまゝにかたるに、ひとつとたがはざりけり。かゝる間、此さいし是を聞に、かたちことなりといへども、今はなつかしく成ぬ。又、日向の国の女は、本よりかたちをしたひて、此よみがへり人をむつまじく思へども、此男は其心なし。去ながら、いづれも其いわれなきにあらざりければ、国人評定して、はや二人の女、をのく心をひとつにして、此よみがへり人を男として、両方五人の子どもは此男を父として、たがひに子共は兄弟のおもひをなして有べしと云ければ、さるべしとて、此国に皆侍けるほどに、何とか思成にけん、いせの女云やう、せんずる所、われらはいせの国のもの也。夫妻(g)子どもに皆本国へ返べし、心ざし思はゞ此国の女は伊勢へ来べしと云ければ、日向の国の女云やう、それはいかに心にてをはすべし。但我は本よりたましいをしたふ事

なし。ひとへにかたちをしたふ者也。されば、たましゐをば、はやあひぐしてかへり給へ。むくろはこれにとゞめをくべしと云ければ、力なくて日向国にとゞまりぬ。さて、これらはむかしの事を思ひくにかたりけるに、いせの女の云事は、よみがへり人のために皆ある事也。日向国の女の云事は、よみがへり人にはうしろ事也。又、いせの女は此よみがへり人を我男とも思はず。日向国の女はよみがへり人を我男と思。又、いせの国の女をみては、男は我つまと思ひ、日向の国の女をみては、我妻にはあらずと思ひけり。子どもの事こゝろに至りても、かくのごとし。かゝる間、それよりして、誠にはある事の、次第不同にしてさだかならず、さかさなる事をば、いせやひうがといひならはしたる也。然に今、此いせ物語は、つや／＼なき事にはあらず。皆有事なれども、さきにも申つることく、事の体をひきかへて次第に書なしたる物語なれば、伊勢や日向と云儀におもひなぞらへて、則伊勢物語とは名づけたるなり。

伊勢物語知願集 二始

【初段】

問 むかし男うあかぶりして、ならの京かすがの里にしろよしてかりにいにけり。其里にいとなまめきたる女はらからすみけり。此男かひまみてけり。をもほへずふる里にいとほしたなくてありければ、心ちまどひにけり。男のきこゝろたりけるかりきぬのすそをきりて哥を書てやる。其男しのぶずりのかり衣をなんきたりけると云り。大かたはじめより終まで心得ぬ事ども也。昔男とはたれ人ぞ。又うあかぶりとは何事ぞや。

答 むかし男とは、在原中将業平也。うあとは、はじめの事を云也。かぶりとは、官成るをいふ也。されば、業平のはじめてつかさ

給たる事なり。

問 はじめのつかさはいくつばかりのとし、いづれの帝の御時、何と云つかさを給りけるぞや。

答 業平はさきにも申つることくに、淳和天皇の御宇、天長二年にうまれたりしが、仁明天皇の御時、承和八年正月七日うあかぶりす左〔a右bう〕近太夫将監になる。其年十七歳也。

問 さて、しろよしてかりにいにけりとは、いかなる詞ことばぞや。かりとは、しゝがりが、たかがりが、またかりそめの儀か、是を承らん。

答 しろよしてとは、かすがの里に知行の所領ありけるなり。但しる所を〔bと〕こそ物語には書べきを、此所はまさしき我所領にはなかりけり。母伊豆内親王の御領にてありけるを、なりひら我所領がほにもてなしてくだりけるゆへに、よしの詞をば書侍り。又、かりとは、たかがり也。業平は家のたかがひにてありければ、たかがりを常にこのみてしけり。是は承和八年正月廿八日の夜大雪ふりけるに、寅の時都を出て、私のせうやうのたかがりをしける也。是を勅使なんど云人のあるはひが事也。又、しゝがりと云人も有。是、又、ひが事也。其故は、鹿は春日大明神の仕者にて、あらし詞だにもかけぬ所也。いかでか、ましてかの所にて、しゝこゝろがりをばすべき。かへすく、空事也。

問 其里になまめきたる女はらからすみける、とは云り。なまめきたるとは何事ぞ。

答 なまめきたるとは、すぐれてやさしきにはあらず。すこしやさしく〔a bば〕みたるを云なり。又、女はらからとは、一腹のをとゝいの女あまたあるを云也。

問 さて、此女はらからは、いかなる人の娘にて、ありけるはいくたりばかりありけるや。

答 此女はらからは、近江大掾うたのかみ中納言名虎が子、紀有常が娘也。おとゝい二人此里に栖ける也。

問 此男かひまみてけりとは、いかなる詞ぞや。

答 かひまみとは文字には垣間見と云り。かきのひまよりのぞくを云也。但、文字にはかく書きたれども、必かきのひまばかりにはかぎらず。何にても物のひまよりのぞくをば、かひまみと云べし。是も業平の「いと」春日の里に出て、雪の朝かりをしける事を、女、色このむものにて、雲の上の若人のありさま見んと思て、忍つゝかくれて見けるを、業平、心ふかき人にて、松のかげで（に歎）忍てのぞきけるを、かひまみてけりとは書たる也。必かきにはかぎらず。たゞ、物のひまより見るを、かひまみとは云也。

問 たとへば垣にはかぎらずとも、文字にかきまみとかきたれば、かきの饑なん也。さらば、かきまみとこそ云べきに、いかにかひまみとは云り。

答 其事也。文字のまゝにかきまみてけりと云は詞のこはければ、やまとことばのならひにて、やはらげて、かひまみとは云也。但さればとて、いはるゝまじき文字をよごさまに云事なし。五音にてもあれ、ひゞきにてもあれ、かよふに取て書ならい也。きのひゞきは、い也。されば、ひゞきにつ「き」きて、かきまみと云べきをかひまみてけりとは云り。さればこそ、ついでのはかべにたてたる板をば、垣しろに立たる板なれば、文字にはかきかたと書たれども、ひゞきにつきて、かいがたといひ侍り。それがごとく成るべし。

問 おもほへずふる里にいとほしたなくてありければ心ちまどひにけり、と云り。おもほへずとは、何事のおもほへざりけり。業平はもと春日の里にすみけるか。また、いとほしたなくとはいかなる詞ぞ。心ちまどふと云も心得ず侍り。

答 ふる里は業平の古郷にはあらず。奈良の京は、すでにたいらの

京にうつされて後は大かたの古郷になりたれば、世にをほ（本ノマ）せたる古郷也。されば、ふる里に成はてゝ、今はさるべき人もなきに、いかなる人のすむらん、をほへぬ物かなとあやしみたる事を「いと」云り。いとゞは、いたうと云詞也。はしたなしとは、不足なき事をいふ也。何にても物のたらぬをば、はしたなると云り。されば、人をも、人々しらぬ（しらぬ）をば、はした物と云。又、紙などをも、一帖にたらぬをば、はしたがみと云。是ならず、有べきものゝたらぬを、みなはした成と云り。しかるに、此女はみめかたちめでたく、としわか、心ばへ情ありて、いろめきたれば、何事もふそくなくてありしかば、はしたなしとは云り。はしたなしとは文字には半无と書り。又、心ちまどいにけりとは、此女を見つるより、いつかむねうちさわぎて恋の心つきそめたるなり。

問 男のきたりけるかり衣のすそをきりて哥を書てやる、と云り。必かり衣のすそに書ける事は別のやうありけるか、また、おりしも紙などのあり「いと」あへざりけるか、をほつかなし。

答 いかでかさばかりの色ごのみの、墨筆をもつ程にて紙をもたざるべき。されども、いまだかく思ふと云心を女にもしらせぬに、せちに心のみだりければ、人しれぬ心の内のみだるゝよしをいはんとて、わざと詞のたよりにてかり衣のすそには書ける也。

問 まことにさるべし。但しのぶずりのかり衣とはいかなるすりを申侍ぞや。

答 しのぶずりにあまたの饑あり。一には、文をかすかにすりたるすりを云。又、文をさだかならず、みだれてすりたるを云とも云り。又、しのぶずりとして、必さだまれるすりなし。地体としてすりとも云物は、みちのくにしのぶのこほりよりすりはじめ、みつぎ物にたてまつりし也。しかれば、惣て、すりの名をしのぶずりと云。あまたの説はあれども、をほ「いと」くは、古哥をみるにしのぶずりをよ

みたる哥にはみだれたる事をよみたれば、ふかくすりをいふべきにや。ことさら此物語によみたるはみだれたるすりに待べし。哥云、

春日野、わかむらさきのすり衣しのぶの乱れかぎりしられず

問 此哥の心は何とよめるぞや。

答 色あるわかき女をみて、恋の心のみだれて待れば、此かり衣しのぶすりを紫にてすりたりけるをたとへて、わかむらさきのすり衣とよめり。かすがのとは、紫のゑんになり、今又、さしあたりたる所なれば、春日野、わか紫とはつゞけたり。しのぶのみだれとは、人にしられぬ心のみだれたる也。かぎりしられずとは、思ひをほしと云心也。

問 となんをいつきていひやれりける。つゝみでおもしろき「うき事」
とや思ひけん、

みちのくのしのぶもぢずりたれゆへに乱そめにしわれならなく

と云り。をいつきていひやるとは、いづくよりいづくにをひつかせけるや。

答 女の物見て帰りける道によりをひつかせける也。

問 つゝみでをもしろしとは、いかにいへる心ぞや。

答 此女、色このむもの也ければ、此男をみて心にかたりければ、さすがに出んもはづかしく、たよりなくて帰りけるに、男のもつゝみでをもしろし、これに

つきて返事せんとはおもひてありし也。

問 さて、此返事は何としたる哥の心ぞや。

答 みちのくとは、しのぶといわんずるたよりのためなり。しのぶもぢずりとは、かの国にもちふとてあばらにをりたるふに、此「しのぶ」のぶすりたる也。是、しのぶの都にすりはじめたるすりなり。

されば、誰ゆへにさやうに心はみだれたるぞ、よも我ゆへにみだれ

たる心にはあらじと読り。但此哥はまさしき女のうたにはあらず。

河原の左大臣融大臣の哥也。それを、この返事にたゞいましつべき哥なれば、心きつて返事にしたるなり。此哥は、古今恋の都（b部）に入たり。

問 彼大臣はいかなりける事によみ給へりける哥ぞ、をぼつかなし。

答 かの大臣、年来久しく女にかよひ給けるほどに、いかゞありけん、その女をすきめて、こと女のもとへかよひ給ひけるを、もとの女恨てつれなかりければ、大臣さすがに心にかゝりておぼへ給ければ、此うたをよみてつかはしけるなり。

問 さて、此哥の心こそ「うき事」今の返事にはあひかなへりともをほ

へね。此女の哥と聞には、業平のもとよりして、しのぶのみだれ限しられずと云やりたる事なれば、誰ゆへに心はみだれたるぞ、よも我ゆへにみだれたる心にはあらじといへる、其いわれ有てきこゆ。

然に河原大臣の此哥をよみ給ける事は、人の返事にはあらん（bで）

、初て人のもとへやりけるに、いかでかの給へる心にてはあるべきや。

答 誠に此ふしんし給ふ所、ことわり也。但、今、女の男のもとへ

やるは、返事にする儀也。又、大臣の女のもとへ思ひ出てつかはしける心に、君ゆへもとよりみだれそめたりし心なれば、又、君にこそ心はつくさめとよみ給へるなり。此哥の心は、或はじめてやるにも其いわれ有。又、返事にするにも其いわれ「うき事」あるべき也。又、しのぶもぢずりは、いづれの哥にもみなみだれたるよしをよめる也。

問 と云哥の心ばへなり。昔の人は、かくばかりいちはやきみやび

をなんしける、と云り。哥の心ばへとは、いかなる事ぞ。又、いちはやしとは、何事ぞや。

答 今あたらしくよむとも此心にぞよめ（ま歎）んずるに、たゞ今

いみじく思合て有ける物哉とほめたる也。又、いちはやしとは、切なりと云詞也。一の義には、すぐれたると云よみのある也。されば、すぐれてはやしと書たるは、せち成事也。また、みやびとは、ふるまひ也。閑の字を書て、みやびともふるまひとも読り。されば、せち成ふるまひしける人となん云り。

【第二段】

問 昔男、奈良の京ははなれ、此京は人の家居未さ（まじ）だまらざりける時、西京にすむ人ありけり。其人、世の人にはまされりけり。かたちよく（り歟）心なんまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし。それをかのまめ男、うちものがたらひて、帰りきて、いかゞ思けん、ときはやよひのつひたち、雨のそをふりけるにやりける、と云り。ならの京をばいつ比はなれけるぞや、をほつかなし。

答 奈良の京をはなれける事は、桓武天皇の御時、延暦三年にはなれて、長岡の京にうつらせ給てありし程に、かしこも人の家居すみにくければ、延暦十二年十月の比、大納言小黒丸、参議宇佐美等を勅使にて、山城国にをたぎの郡を見せしめ給ふに、御使ら帰て、誠にめでたき所に侍り（まじ）けり、四神相応の地也、と誓申によりて、明る延暦十三年に、平の京にうつらせ給ぬ。さて御覽するに、此所、聞しよりもはるかまさりたりしかば、御門ほめ思召て、今は我すへのたえざらんかぎりは、此京をほかへうつすべからずとて、賀茂大明神を鎮守とし奉り祈禱をいたして後、土をもちて八尺の人形を作り、くろがねのよろひをきせて、東山阿弥陀がみねに穴をほりてうづみて、王城を久しく守護せよと云ふくめ給て、塚を高くつきあげて、是を將軍塚と名付させ給ける。其後、天下にわづらひあらんとては、此塚必鳴動する事、いまだたへぬ也。

問 是は大様承し事也。さて、業平西京にかよひける事は何比ぞや。

答 業平が西京に（まじ）かよひし事は、仁明天皇の御時、承和九年の事也。

問 さては、是、ふしんにをほへ侍り。都うつりとは、都を立べき所を見さだめて大内を作りてこそ帝王をはしませ、たゞそゞろにうつり給ふ事はなきぞかし。されば、三年にもいかでか人の家居さだまらざるべき也。然を此事を聞がごとくは、ならの京をば延暦三年にはなれてなり。此京は人の家ぬまださだまらずと申けるは、承和廿（a b 九）年の事也。其間のとしをかぞふるに、延暦廿一年、大同四年、弘仁十四年、天長十年、承和九年までの事なれば、すでに五十八年が間、都に人の家居いまださだまらざりける也。

答 まつたく都をさだまらずとはいわず。又此京と云を大かたおしなべてたいらの京と思給が、さにあらず。平京に取ても、西（まじ）京、東京とてあり。女は西京にすみ、男は東京にすみ侍りき。東京にすむ男の此物語を書詞なれば、東京を西京にたひして此京とは書たるなり。されば、其間は京に里大内をつくりたりしかば、しかるべき人々は皆西京にをほくすみ給ひて、東京は人の家居も西京程はなかりけれども、大内さだまりて程へてける後に、閑院左大臣里大内を作りて、文徳天皇に奉り給ひしより、東京にさるべき人の家居おほくかさなりて、にぎわひはんじやうしける也。

問 此京と云は、すべての京にはをほせずして、東の京ばかりにかざりて云りとはをほへす。其故は、先、ならの京ははなれ、此京はと云つゞけたれば、大かた平の京なれば、いひつゞくも（まじ）おしなべてならの京の相手にこそいひたるらめ。さらば、なんのれうに、ならの京ははなれといへるなり。

答 ならの京は古郷にて、しかもめでたかりし京なれば、半、先都の手にひきて置たる也。案じて御らんぜよかし。ならの京の相手にせば、長岡の京をこそせめ。中に長岡の京をすて、はるかの平

の京をこへていかゞ行べき。たゞならの京はさる事にて、さてをきつ。是体の事は世間におほし。其故は、哥のはじめに、八雲立出雲八重垣と云哥こそ、三十一字にさだめてよみはじめ給へる哥なれば、むかしより哥の父母とも云べきを、是をばたゞ哥のはじめとばかり云ならはして、其後の、難波津にさくや此はなと云哥と、あさか、³¹²山かげさへみゆると云哥をもて、哥の父母と古今の序にも云たり。是などは思の外の事也。打まかせては、八雲立の哥を父とし、其次によみたらんうたを母とすべきに、はじめのをこりは、かりの哥として、後の二首を父母とし侍り。それがごとくに、ならの京をばさて置て、平の京に取ても、東西二京をさだめて、今、東を此京と申は、西京にたひして云る也。

問 是はさても侍なん。抑西京に栖ける女は誰人ぞや。

答 是は白川関白忠仁公良房の御娘也。

問 ひとりのみもあらざりけらし、と云は、同様成女のあまたあるやうにきこゆ（「ゆゆる」）はいかに。

答 其儀なし。此女には男ありしかばかく云也。此男と云は、仁明天皇の御子、文徳天皇のいまだ位につき（「まゝ」）給はざりし時の、忍てかよひ給ひし更衣也。

問 まめをとことはいかなる男の名ぞや。ゆゝしき大事に人々申あひたり。承らん。

答 まめ男とは、ま男也。此外の儀はゆめくしり侍らず。世間人はいひあひたる儀どもは、げにくしからねば、聞もとゞめ侍らず。但、そこに聞給たる儀あらばの給へ、承ん。

と云に、

大納言云 是もいかゞ侍らん、但承しは、まめ男とは、まことの男とこそ人は申侍しか。まことの男とはまめやかかの儀なり。此業平は、平城天皇御子、阿保親王の第五、母と申は桓武天皇の第八御娘、伊

豆内親王也。かたゞ品高き男なれば、真の字を書てまめ男と云とぞ承しか。

其時翁いわく 抑此物語は業平のみずから書たる物也。然に、いかでか我身をほめて（「まゝ」）まめやかの上臈とは申べき。

と云所に、

大納言いわく されば、それ本より業平の筆とは人にしられじとて、わざと書みだりたり。此故に奥にも度々自歎したるあり。その事を申さん。或ときは、人をいやしき男のまづしきと書、我身をあてなるとはほめたる事也。又、かりの使の所にては、つかひざねとある人と云たる。真とある人とは、是も我身をほめたる詞也。かやうに度々我身を自歎したる事なれば、必こゝばかりをとがむべきならずこそ侍れ。

と云に、

又、翁のいわく されば、さやうに物を一方に心得給へる、あさましきぞや。物をほめそしるも、ときによりてふしたがふ事也。彼狩の時、使真とある人を（「と」と）云は、ことほり也。其故は、むかし（「まゝ」）よりかりの使に伊勢へくだりしかども、王氏を出給へる親王の御子などはをせざりしかば、かりの使の中には我身すぐれたりければ、使真とは書たり。又、我身をあて成男と云たる時の人は、大内記藤原の敏行也。是にたくらぶる時は、我身はあてなるなり。しかるに、今、まめ男と云時は、かよふ女と云に、忠仁公の御娘、染殿の後也。又、其男と申に、我身のをさなくてよりつかふまつりし御子、今位につき給ふべき文徳天皇、東宮にてをはしましし御事也。かれこれいづれも皆我つかふまつれる君にましますぞかし。其にたいして我身を誠の上臈と云べきならず。たゞ間男の儀をもちひ信じ給ふべし。

と云に、

又、大納言いわく「誠に」^{まこと}をほせらるゝがごとくはこなたの義はいひやぶられ奉りぬ。又、そなたの儀を難じ申べし。まめ男をば、まをともいひ、又、ま人とぞ云べきに、まめ男といふ。めの字はいかに。五音にてもなし。ひゞきにてもなし。又、やすめ字にてもなし。此めの字をもてあつかへる也。いかゞ心得侍るべき也。

答 此義にはめの字こそむねとあるべき字にて侍れ。其故は、男のために間妻也。女のためには、男は間男なり。これがため、かれがため、かよはして間妻男と云義也。それをことあたらしく、めの字をもてあつかふとの給ふこそ心あさけれ。

と云に、つまりてやみにけり。まことに、此儀はすぐれておぼへ侍り。

問 うち物がたらいてとは何事ぞや。

答 うち物がたらいてとは、男も女も「^{また}」がひに心ゆきて、よき事とおもひつゝ、物がたらいしけるなり。

問 雨のそをふるとはいかなる心ぞや。

答 そをふるとは、ほそくすくなくふるを云也。をと云字は、小の字也。すくなくちひさき義をば、を小と云也。されば、小車とはちいさき車を云也。又小鹿と云もちいさき鹿也。

問 をきませぬもせでよるをあかしては春の物とてながめくらし

つ

と云り。此哥の心はいかにとよめるぞや。

答 春夜はさらぬだに明やすきに、さばかりの心をつくして思ふ人をはじめてあひぬれば、あくるほどもなし。をきてあかしつるやらん、ねてあかしつるやらん、思ひわかぬほどのかなさをよめる也。春の物とはみへて、けふのくれがたを春雨によそへて、此雨を春の物とてながめくら「^{あせ}」しつと読る也。

【第三段】

問 むかしおとこ、けさうじける女のもとに、ひじきもといふ物をやるとて、

思ひあらばむぐらのやどにねもしなんひじき物には袖をしつゝ、

と云り。此女はたれ人ぞ。ひじきもとは何物ぞや。

答 此女は、中納言藤原長良のむすめ、二条の後の、いまだ御門にもつかふまつらでおはしける時の事也。ひじきもとは、海にひじきと云草の有也。もとは、海の草の惣名也。又、思あらばとよめるは、おもふ人だにあらばむぐらのやどのすみにくゝ、いむせからん所にて、袖をひしきねたりとも、よもいむせくわびしからじとよめり。

【第四段】

問 東五条にをほきさいの宮のをはしましける西のたいにすむ人ありける、それを「^{また}」ほいにはあらで心ざしふかかりける人、ゆきとぶらひけるを、正月のとをかあまりのほどに、ほかにかくれにけり。あり所はきけど、人のゆきかよふべき所にもあらざりけらし、なをうしとをもひつゝなん有ける、またのししの正月に、梅のはなざかりに、こぞをこひて行てみれど、こぞにるべうもあらず、打なきてあばらなるいたじきに月のかたぶくまでふせりて、

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にしていへり。おゝきさいの宮とは誰人ぞ。又、にしのたひにすみける人はたれぞや。

答 おほきさいの宮とは、冬嗣の御娘、五条の後、順（メクルノ）子也。又、西台にすむ人は中納言長良二条の後也。五条には御めいにてをはしましき。

問 二条の「^{あせ}」后はいかなるゆへにてこゝにはすみ給けるぞや。

答 五条后は御をば、二条后はめいにてをはしましけるに、長良中納言のもとより此姫君には宮仕の事を心にかけん〔bて〕思給ひければ、宮仕の有様をもきゝならはせて、後は御門に奉んと思ひ給ひて、御をばめいのあいだなれば、しばらくつけ奉らせ給へるなり。

問 ほいにはあらで、心ざしふかゝりける、と云り。心ざしふかくてといはゞ、ほいにありてこそかくべきに、ほいにはあらでとかけ事、心得がたし。いかに侍る事ぞや。

答 ほいと云事はいかにと心得給へるぞや。つねに人のかける本意とばし思給へるか。其儀にはあらず。是は、あらわれたる心にはあらで、心ざしふかき人のと云る也。また、とぶらふとは、とふまといへる心なり。又、正月をむつきと云事は、年の初の月なれば、したしき人ゝ行むつびかよふ故にむつい〔bび〕月と云心也。むつひ月と云詞を略して、たゞむつきとはいふなり。

問 ほかにかくれにけり、あり所はきけど、人のいきかよふべき所にあらず、とは云り。

内裏をば雲の上と云。此名をつく故にこそ、人之ゆきかよふべきやうもなかりければ、雲の上と云名をうしとは思けるなり。またの年む月と〔bとは〕貞観二年正月事也。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にするとよめるは、月やあらぬ春やむかしのはるならぬとは、おぼめくたがひたる心也。此哥にあまたの義あり。月もまさしき去年の月、春もこぞの春なれども、我わが身ばかり、こぞのみにてなし。こぞよりさきのいまだ女にあわざりし時、たゞ一人物を思てみし月のごとく、ことしもまた、たゞ一人物を思てみれば、我身ばかりこぞのみにてなし。うかりしものとのみはと云也。

問 抑此所は、をほきさいの宮、閑院左大臣冬嗣の娘、當関白忠仁公の御いもふと、染殿の後の栖なり。内外共にかたぐもつて時め

き給ふべき人のすみ給へる所ぞかし。いかなれば西台の姫君一人をばせばとて、たいのあらは〔bあばら〕になりけるぞや。これふしんなり。

答 誠にあれてあばらに成たる事はなし。台のや榎〔bえん〕などはすのこ敷とて、あつきくれのめんを取て、あひ一寸ばかりづゝあけて、つりどのゝすのこのやうにしきたる也。それを業平、をのが心ざすあるまじの女なくなりて去年にかはりて侍るさびしさを心のうちになげきて、あばらなるいたじきとは書たる也。心にはあれたるよしをさしはさみめ歎ども、上にはすのこのしきを云る也。

〔第五段〕

問 むかし、ひがし五条わたりにいと忍びて人いきけり。みそかなる所なれば、かどよりもゑいらで、わらはべのふみあけたるついでにくづれよりかよひけり。人しげくもあらねども、たびかさなりければ、あるじ聞付て、夜ごとに人をすゑてまぼらせければ、いけどえあわで帰りけり。是はさきの所か、また、こと所か。あるじはたれ人なれば、さやうにゆるしけるぞや。

答云 是はさきの所にはあらず。中納言長良の家の、後には大納言国経の家也。母こにをははしければ、二条の後、はじめこにをばせし時かよひ侍りけるを、宮づかへの事を心にかけてれば、大納言も母北のかたもつみしと〔bいみじう〕ことさま成事をいとひ給ひけるを、業平心くるしがりければ、姫君の弟遠経など心有人にて、知ぬかほして時ゝゆるしてかよわせ給ひける也。哥、

人知れぬ我かよひぢの関もりはよひくゝごとにうちもねなんと云り。ねなゝんとは打ねよといへる心也。と読りければ、いといとう心やみけり。あるじゆるしてけり。かく哥をよむにつけて、な

ぐさむばかりはなくて、いよく恋の心せちに心やましき也。

【第六段】

問 むかし男ありけり。女のえうまじかりけるを、年をへてよばひわたりけるを、からうじてぬすみて、いとくらきにきにけり。あくた川と云河をおひてきければ、草の「ささうへにをきたる露を、かれは何ぞと男にとひけるを、ゆくさきとをく夜も深ければ、鬼ある所ともしらで、神さへいみじうなり、雨もいとふぶりければ、あぼらなるくらに、女をばをくにおし入て、男は弓やなぐいおいて戸口にをり。はやよも明なんと思ひつゝ居たりけるに、鬼はや一口に喰てけり。あはやと云けれど、神のなるさはぎに、えきかざりけり。やうく夜も明行に、みればあてこし女もなし。あしずりをしてなげどもかひなし。

しらす玉か何ぞと人のとひし時露とこたへてけなましものをと云り。此女は二条後の、御いとこの女御のもとにつかふまつる人のやうにてあ給へりけるを、かたちのめでたくをはしければ、ぬすみて出たりけるを、女のせうと堀川大臣基経、大納言「おと太郎国経兄弟、まだ下臈にてうちへまいり給けるに、いみじうなく人のありけるを聞付て取留給けるなり。其をかく鬼とは云也。後のまだいとわかくて、たゞ人をはしましける時の事也、と云り。いづれも此物語は不審なる中に、ことにをぼつかなし。其故は、先、詞にうまじかりける女とは何事ぞや。

答 うまじとは我物にもすまじき事也。得がたき儀也。得の字をうとよめり。不得とかきてうまじきとはよめり。

問 抑あくた川と云はつの国に有とこそしりたるに、今基経、国経、内裏へまいり給けるに、道に此川あるよしきこゆれば、津の国の事とはゆめくをぼへず。不審也。京中にもなをあくた川とてあるに

や。

答 京中にもあり。其故は、大宮川「おとをあくた川と云。但、二条より上をいはず。

問 これこそ猶不しんなれ。大宮川をあくた川と云だにもふしんなるに、二条より上をばいわず下ばかりを云事、能く心得がたし。

答 其事はよな、此大宮川を一条大宮わたり、陽明門の上より内裏にやり入て、御河水になせり。それを又、二条大宮、郁芳門の下より此川をやり出すがゆへに、陽明門より上にはちりあくたひとつもながさじとさはやぐるを、郁芳門の下よりはいたする事もなく、ちりあくたを取と「おとちり」て行て此川に入也。されば、清和天皇の御時にや、大納言いまだわかくてありける時、女にちぎる事ありて、月あかりける夜、郁芳門の辺にたゞみけるに、或御ぞうし、わかき女のちりをかきあつめてもてきたり。此川にながし「おとけるをみて、何心もなく、わたらでにごるあくた川哉、と云りけり。されば、たむらの御門の御時、事ありて津のくに須磨と云所へながされるに、あくた川をわたりける時、是に思合てかく口ずさみたるを、此女こざかしく聞とがめて、かうなんありつるといひけるより、此河をもあくた川とはいひならはしたりけり。されば、仁和御門の御時、遍照僧正、内にまゐりたりけるに、御河水に花のちりてながるゝをみてよみ侍りける、

ちりぬれば後はあくたに成花を思しらすもまどふてう哉

と云り。是もかの御川水の花のながれ出るを思出てよめる也。此哥は古今集の物名部に、くたにを隠てよめる、とて入たり。

問 是は皆承ぬ。抑、此女をばいづくへぐしてゆかんとて、こゝにはきけるぞや。「おと」

答 此内裏へ具してゆかんと思ひける也。

問 是こそ誠しからぬ。さばかりの後、かやうの人をぬすまんには、

本より内裏にあらんをだにもほかへこそはとりて行ぬべけれ、まして、ほかなる人を具して内裏へきたらん事は、とらの口に手を入るゝにてこそ待らめ。是留よと云にこそにたれ。いかゞ心にうべきや。答 此女をぬすみて隠ける事、度々の事也。或時は都の外までゐていで、かやがしたばにかくしてやきいだされ、或時はふくさ(a bふかくさ)に家をつくり、秋の野を作りて、はぎ、をみなへしの中、かくしておきなどせしかども、又かり出されなどして、いづくも世はたゞひとつにてかりもとむれば、かくれがたし。なか／＼、たゞこの内裏の中は、人の思ひよらぬかたも有なんとて、世間の人のけしきみんほど、是にかくさんと思ひつゝ、「あゝ」と是へあひぐして来ける也。問 行さきとをく夜もふけぬといへば、都の内とはをほへず。げにも遠行けるとこそ聞へて待るめれ。是はいかに心うべきや。

答 さばかりやさくれたる人の、五条京極わたりより二条大官のわたりまで、人をかきをひ、かくゆきけん心のうち、さこそはほど遠く思けめ。さればかく云り。

問 鬼ある所と云り。されば山里などにやとこそおほへたれ。内裏にいかなる鬼かあるべきや。

答 内裏には鬼の間と云所の有也。其名をもちて鬼有所とは書たる也。又神さへいといみじうなるとは、是も内裏に神なりのつぼと云所あり。さてま「bかく」はかける也。雨のいみじうふるとは、なみだの雨のふるを云也。又、あばらなるくらとは、官庁を云也。

此庁は五節大嘗会の具足と「いさむりをく所なれば、宝蔵の一分なりといへども、ぬす人のをそれなきゆへに戸などもきびしくかためず、たゞあるに随てをきたる宝蔵なれば、あばらなるくらとは書たるなり。又、ゆみやなぐいおふとは、誠にはおはね共、いふかひなく鬼に妻もとられたる事のこがましさに、物語の曲にかきたる也。

問 鬼ある所とばかりいへるこそ、鬼の間ともきこゆるに、ここには鬼はや一口にくひてけり、と云り。されば、まさしく鬼のくひたりけるときこゆるはいかに。

答 是はかの後の鬼と心指ての給へる也。其故は、鬼は人をかりもとめてとるが故に、とられじとて人は必にげかへる也。然に此後ゆへにかりもとむる人々なれば、此せうとたちを鬼にたとへての給へる也。此鬼といはんとてこそ、鬼有所と鬼の間をかねて「いひひ置たり。たゞいひをきたるにはあらずはべり。

問 さらばまことの鬼ならずば、鬼とりてといへかし。食てけりといふだにもことふくしきに、あまつさへ一口にくひてけり、と云り。一口のごと葉、いと不審也。

答 鬼と云程ならば、くひてけりと云こそたましめいであれ、たゞ鬼取てけりと云は、無下にをめてきこゆれば、食てけりとは云り。一口と云詞、鬼の人を食にも、をのづから血などもこぼれからへら／＼なんどもこのなるに、是は其名残もなく女をうしなひたれば、一口にくひてけりとは書たり。又、神のなりさはぐとは、此御せうとたちのみづからさはぎもとめ給ければ、高人のか様にさわぎ給を、神なりさはぐとは云り。又、神鳴のつぽによそへて、神鳴さはぎ、ゑきかすと書る也。哥には別儀もなし。

問 抑「さき是は二条の後の、いとこの女御の御もにつかうまつるやうにて居給たりけるを、と云り。さきには、又、おほきさひの宮の御もとにをはします、と云り。これは御をばにてこそをはしますを、今は又、いとこのねうごとと云るこそ心得がたけれ。

答 此をほきさいの宮の御所を、後には忠仁公良房の御むすめ、染殿の後に奉り給ひし也。これもほきさいの宮にはめひにておはしましき。されば二条の後、やがて此御所にとゞまりて、御いとこの染殿の后につき奉りし給ひし也。

問 抑国経は兄也。基経は弟也。此物がたりに、次第にはかゝらずして、先、弟を書て、後に太郎国経大納言と云たるはいかにぞや。

答 弟基経は長良第三子にをはしけるを、伯父良房の養子にして撰録をゆづりて、「あまつさへあまつさへ我朝の撰政をはじめて太政大臣まで成給ひし人なれば、弟なれども、先、上に書たり。兄国経はわづかに大納言までこそなり給ひしかば、後にかける也。

問 又下臈にて、とはいくら程の位にてをはしけるぞや。

答 まだ下臈とは、いみじく高つかさもならぬ時也。弟は中納言、兄は中将にてをはします時也。

問 抑それほどに夜ふけてくらきに、此兄弟二人、何事によりて内裏へはまいり給けるぞや。又、男も女も互に心行てこそとられけめ、それも、さしも人の聞ほどになきける事よ。是、又、心得がたし。

答 基経、国経二人、此事を聞つゝ、わざとをひつきてとり返し給へる也。又、女、男に心行てとらるゝほどならば、いかでかなき侍るべきなれども、業平に心あわせたりといはんも無下に念もなければ、「たゞたゞ非道にとられたるやうにせんとて、なくとはいへり。まことになきたるにはあらず。

【第七、八段】

問 むかし男、あづまへいきけるに、伊勢尾張のあわひの海づらを行に、と云り。誠にくだりけるか、をほつかなし。

答 序に云けるがごとく、実にくだりたるにはあらず。たゞつくりごとにしたるの中くだりと思給べし。さりながらも物語の面につきて、先下りたるとの給ふべき也。

問 身をえうなき物におもひなして京にはをらじ、と云り。身をやうなき物とはいかなる心ぞや。

答 やうと申は、をほやけにつねにつかまつりけるつかさを申也。

しかるに、業平は右馬頭にて、常に君につかふまつるべき人の、此女ゆへに身をほだしながしつる（か歎）はされて君にもつかまつらず成にければ、やうをもち「ながし」ながら、君のやうにあらざりければ、身をやうなき物とは云也。

哥云、

信濃なるあさまのたけに立けぶりをちこち人のみやはとがめぬと云り。此哥は何とよめるぞや。

答 しなのゝ国あさまのたけは、いつとなくもへて、けぶりたへぬ山也。此けぶりを、をちこち人みやはとがめぬかとよめり。」

——九州大学大学院修士課程——